




2016 年度大学院看護栄養学研究科栄養管理学専攻 学位論文審査報告書

学籍番号	20142101	学生氏名	中川 幸恵
学位論文 題目	2 型糖尿病患者に対するトランスセオレティカルモデルに基づく栄養指導 効果		
主 査	武蔵 学 	副 査	大久保 岩男  森谷 繁 
<p>近年、糖尿病患者の栄養指導において、患者の食行動変容ステージや自己効力感を高めるようにアプローチするトランスセオレティカルモデル(TTM)が重視されており、本研究では2型糖尿病患者に対する TTM に基づくより効果的な栄養指導法を導くために、重回帰分析とパス解析法を用いて HbA1c 値減少(改善)に対する栄養指導頻度と糖尿病罹病期間、食行動変容ステージと自己効力感得点等の栄養指導効果に関連する諸要因間の構造を明らかにする検討を行った。</p> <p>全国の 281 病院に通院する 2 型糖尿病患者総数 619 名(女性 272 名:43.9%、年齢 58.4±0.5)を対象とし、管理栄養士による栄養指導の開始時と 6 か月間の臨床データを収集し、糖尿病罹病期間と栄養指導の頻度が患者の食行動変容ステージや自己効力感に及ぼす影響を調べ、両値の変化と HbA1c 値改善の関係を重回帰分析した。さらに、パス解析法を用いて HbA1c 値改善に対する栄養指導頻度と糖尿病罹病期間、食行動変容ステージと自己効力感得点等の栄養指導効果に関連する諸要因間の構造を解析した。</p> <p>6 か月間の栄養指導による HbA1c 改善効果は、食行動変容ステージ得点と自己効力感得点が高まるほど得られやすかった。食行動変容ステージ得点と自己効力感得点の上昇量は、性別、糖尿病薬の変更、HbA1c 初期値、罹病期間、栄養指導頻度とは独立して HbA1c 値改善の規定因子となった。TTM に基づいて行われる栄養指導は食行動変容ステージと自己効力感を効率的に高めることで病態改善を促すが、罹病期間が指導効果に負に影響することが示された。糖尿病罹病期間や指導開始時年齢は HbA1c 値改善に直接または間接的に影響する一方、TTM に基づいた栄養指導法は頻度を増やすことで患者の自己効力感の高まりを経て食行動変容を促し、HbA1c 値改善効果を持つことが確認された。自己効力感を高めるためには改善目標の設定が重要であるが、食行動を変容させるためには、糖尿病に関する知識の習得や運動行動の実践を同時に行うことが一層効果的であることが判明した。糖尿病罹病期間や指導開始年齢に関わらず、栄養指導ごとに目標に照らして現状を観察・確認することで、患者自身が自らの行動を客観的に評価できることが有効であった。特に初回の栄養指導では、食行動や運動行動変容だけでなく、知識教育を同時に行うことの重要性が示唆された。</p> <p>本研究は、2 型糖尿病患者に対して TTM に基づいて行われる高頻度の栄養指導が、自己効力感の上昇を経て食行動変容ステージを上昇させることにより、糖尿病患者の罹病期間に係わらず病態栄養改善効果を高めることを明らかにしており、栄養学分野に大きく貢献するものである。審査委員一同は、その点を高く評価し、本研究を博士論文として認めるものである。</p>			

▼どちらかに○

判定	合 ・ 否
----	-------